

研究課題 (テーマ)	英語にチャレンジ (English Challenge)		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	工学部・教養教育	准教授	中島 崇
	工学部・教養教育	講師	碓井 エリザベス
研究結果の概要			
<p>&lt;目的&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>誰もがいつでも何をしても英語で意思疎通が行える環境を創る。</li> </ul> <p>&lt;平成30年度の達成目標と活動内容&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>中島が個人的に行っていた Chat を、English Challenge Program の一環として全学的に展開する試みを行った。具体的には、平成30年度は以下の3つのパイロットプログラムを実施した。 <ol style="list-style-type: none"> <li>Chat</li> <li>The Budge Group</li> <li>教員・事務局員のリクルート</li> </ol> </li> </ul> <p>(1)Chat は中島がすでに過去20年に渡り実施してきた取り組みを拡大運用したものである。英語運用能力の向上を望む学生がお昼時間を利用して集まり、とにかく英語を使い意思疎通を図るという活動である。これはまた授業で学んだ知識を実際に運用し、定着を図る取り組みでもあり、授業の補完的役割も担っている。Chat の実施回数は全105回、参加者数は延べ425人であった。参加学生は知能の学生が最も多く全体の半数近くを占め、次いで機械の学生が約25%と続いており、この両学科だけで全体の75%近くになっている。次は電子の学生で15%程度の参加率となっている。残り3学科(環境、生物、医薬)が若干名というものであった。参加学生の多くは1・2年生であるが、3・4年生も少数ながらおり、院生の参加も見られた。また本学の非常勤講師も協力的で、数名の講師がボランティアで参加した。Chat では英語を使うことに対する心理的抵抗感の軽減と、知識の定着を通じた英語運用能力の向上が期待されるが、これらは概ね達成されたと考える。</p> <p>(2)は「いつでも・どこでも・何をしても英語」の実践である。バッジを付けた人同士では「いつでも・どこでも・何をしても英語」で話すのである(学内外を問わない)。The Budge Group の取り組みは十分な成果をあげたとは言い難い。一般学生に囲まれた中で、学生同士英語で会話するには心理的抵抗感が相当強いようである。また、教職員と学生との英語による意思疎通も円滑にいったとは言えない。</p> <p>(3)は今までほとんど目を向けられたことのない教員と事務局に目を向け、目標達成のために協力をお願いしたものである。金曜日の教職員向け Chat は予想以上に活発であるが、職員が積極的・継続的に参加しているのと比較すると、教員の参加度は決して高くなかった。</p>			
今後の展開			
平成30年度は、中島が個人的に行っていた Chat を、English Challenge Program の一環として全学的に展開した最初の年であった。特徴的な点としては、学生だけでなく教職員も対象として行ったことである。来年度はこの取組を深化させ、専門の教員との連携を図り、教員の英語運用能力を向上させる取り組みを行う予定である。			